

『禁断ラヴァーズ』

著:水月真兎

ill:明神 翼

「おはよう……」

目と鼻の先の距離から微笑みかけてくる真に、どきんとする。気づくと、辰巳は広い胸に抱かれて眠っていた。

真と同じベッドで眠るようになってから、何度もこんなことがあった。よほど居心地がいいのか、無意識に真の胸元に潜り込んでしまうらしい。

さんざん誘っておいて、意識するもの馬鹿馬鹿しくて、辰巳は自堕落に手を伸ばし、形のいい頭を引き寄せた。唇が重なり合う寸前、真の腕にキスを阻まれる。

「だめだよ、辰巳さん」

「お堅いな……」

穏やかな口調でたしなめられると、真の気を引きたがっている自分がなんだかみじめになる。ふて腐れて文句を言うと、思いがけず困った目つきが辰巳を見た。

「我慢、利かなくなるから……」

案外、若い真のほうが衝動を抑えるのに苦労しているのかもしれない。辰巳のことを大切にしたいのだと言ったのは、どうやら本気のようにだと、いくらか機嫌を直した。

「いいだろう？ セックスぐらい」

真が望んでいるような真面目な恋愛をするつもりなど欠片もなかったけれど、子供のくせにあれだけ巧みなキスをする彼とのセックスがどんなものか、ふとどきな興味はあった。

辰巳のたくらみを見抜いているように、真は感心できないと眉を顰める。

「辰巳さんが何人もの女(ひと)と付き合ってたのは知ってるけど……。けじめのないことはしたくない」

「ったく。優等生は……」

けじめなんて、なんの役にも立たない。そんなものにこだわるからつまらないのだと、真をなじった。

聞き分けなくぐずる辰巳に、真はどちらが親かわからない態度で嘆息する。

「それに、早く用意しないと、学校、遅れるよ」

「かまわないよ。だいたい、おまえのせいで部屋に女、連れ込めないんだろうが……」

欲求不満の責任を取れと、辰巳はなおも真に食い下がった。セックスなんてどうでもよかったけれど、自分の誘いを素っ気なくかわそうとする真に、半分、意地になっていた。

「僕は、辰巳さんにだらしないことはしてほしくないんだよ。ほら、起きて……」

静かに差し伸べられた腕に、強引に上体を抱き起こされていた。

お堅い真と違って、辰巳はパジャマなんか持っていなかった。もともとずっと一人暮らしだったし、寝る時の格好なんか気にしたことはない。

小さな下着一枚で裸同然の辰巳を、真はやはり眩しそうに頬を染めて見つめた。その顔つきを見れば、なおさら、なぜ自分を拒絶するのかとカッとなる。

「だらしないうってなんだよっ？」

「無責任なセックス……」

真に冷ややかに指摘されようと、辰巳は無責任なセックス以外はしたことがなかった。セックスするのに、快楽以外の理由が必要かと真を睨む。

「おまえにだって、男の生理ぐらいわかるだろうが？」

「だからって、本能のままに欲望に流されてたら、またあっちこちで恨みを買うよ」

真が、少しも声を荒らげようとはせず、腕の中の辰巳を静かに諭すような口調なのが、口惜しくて腹立たしい。

「また、ってなんだよ？」

『ラ・ブランシェ』のみちるさん。『緋月』の薫さん。それから……」

辰巳が同性を誘ったのは、後にも先にも真一人だ。けれど、今まで付き合ってきた女たちへのいい加減な態度のことで持ち出されると、辰巳に反論できる余地はわずかもなかった。

「もういいっ……わかった」

全部終わった話だろうと、古傷を非情に抉る真を恨めしく見た。いくら真の目の前に愁嘆場を晒してしまったとはいえ、どうして馬鹿正直に話してしまったのかと、今さらのように後悔した。

確かに、あの頃までは真をセックスの対象にしようなどと、ほんの少しも考えてはいなかったから。

内心は治まりがつかないものの、正論で真には太刀打ちできないことを悟って、唇を噛む辰巳を、長い腕に抱え込んで、真の唇がちゃんと可愛らしく額に触れた。

馬鹿にしているのかと、辰巳はいつそう物騒な目つきを上げる。

「子供じゃないんだぞ」

「知ってる」

「ガキっ！」

こんなのでごまかされるかとなじりながら、そのくせ痩せた体をすっぽりと包み込む腕に、どこかで癒されていく自分を感じてしまう。

「ごめん」

口では謝っていても、わがままで強情で、どっちがガキだとでも言いたそうに、真はひどく明るい笑い声を上げる。

「笑うなっ……」

意識してようやく、自分が子供だと馬鹿にしていた真に甘えているのかもしれないと気づき始めた。

セックス抜きで、こんなふうには辰巳の側にいてくれる者などいなかった。真だって、自分とセックスしたくないわけではないのだろうが、少なくとも体だけが目的ではなさそうだった。

若くて見た目も性格もいい真なら、辰巳みみたいな八つも年上の男の体でなくとも、もっと快楽をくれる相手がいくらでもいるはずだ。

けれど、むしろ真がセックス以外で自分を求めてくるのが、辰巳には不安で、無性に苛立ってしまう。いっそ、単純にセックスだけの関係に溺れていられるほうがマシだった。

抱きしめてくる腕を振り払うようにベッドを出て、そのくせ、わざとらしく真に見せつけ

るみたいに、ゆっくりと白いシャツに袖を通した。そのワイシャツも、昨夜のうちに真が用意してくれたものだ。

「辰巳さん、アンダーシャツ……」

「嫌いなんだ」

いつものように真が咎めてくることも、承知の上だった。先にアンダーシャツを着てと指図する真に、聞き分けのない子供じみた駄々をこねた。

「でも……透けて見えるよ」

「何が？」

ふいに、言いにくそうに言葉を濁す真に、辰巳は意地悪く訊き返した。

真が、真っ白な胸にことさら赤くアクセントのように見える乳首を気にしていることは、とっくに知っている。

「なら、学校の中で、上着は脱がないで」

「俺にキスひとつできないくせに、一人前に焼きもちか？」

嫉妬したいなら、やることをやってからにしろと、辰巳はさらに真を挑発した。

「辰巳さんっ……」

叫ぶように名前を呼ばれたと同時に、強い力で引き寄せられた。噛みつくみたいに重なってくる唇は、いつもの真の冷静さや穏やかさなど欠片もない。

息もつけられないほどの濃密なキスにとらわれて、弱い粘膜をまさぐる舌に、ぞくりと背筋がわなないた。

(こいつ……やっぱ、慣れてやがる……)

真は辰巳に、女の子となら経験があるといった。女性相手にこんなキスやセックスを覚えた真が、どうして自分みたいな男を欲しがると、率直な疑問を消せない。

「こんなキス、どこで覚えた？」

「約束して」

真の女の子なことなど知りたくないと思ったはずなのに、気づけば追及するような言葉が口を衝いていた。

辰巳の質問など耳に入っていないように、真はきついまなざしで念を押してくる。

(こいつ、聞いてねーな……)

人の話を聞かないのは辰巳のほうなのに、それを棚に上げて、こっそり舌打ちした。でも、ベッドの中でさんざん真を煽ったのは、この顔が見たかったからだ。

ずるい方法だとわかっていても、辰巳を欲しがっている真の本心を試したかった。

「わかったよ。脱がなきゃいいんだろう」

面倒くさいガキだと約束しながら、辰巳はやっと溜飲を下げていた。真の気持ちなど知ったところで、かえって自分が追いつめられるだけなのに。

地雷があるとわかっていて踏んでしまう自分の歪んだ性格に、たちまち後悔して、真の腕を逃れるように廊下に出た。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>